

Title	労働者心理学の体系概観
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.10 (1937. 10) ,p.1479(81)- 1530(132)
JaLC DOI	10.14991/001.19371001-0081
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19371001-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

どの程度に取引所取引を統制し弱者を保護するかは一つの疑問である。けれどもこの株式取引所統制法の發布せられてゐる尙數年にしかならないが、既に委員會に登録せられた證券の數は六千以上に上ぼつてゐる。而も此の登録事項は一般に公開せられてゐる。華府に於ける委員會の事務所には公衆閱覽室が設けられ、一九三五年一月には之を利用するもの極めて少數であつたが、現在では毎月數千に上ると云ふことである。

第三 相場操縦及び取引方に對する統制

尙取引所取引の内で欺瞞的な取引方法は或は禁止せられ、或はその事實を明かにして之を錯誤に陥るを防止するやうあらゆる注意を拂つてゐる。

現行取引所法の下に於て聯邦準備局特に證券及取引所委員會の權限は廣汎に亘り絶大なもので、且つ微細な點まで統制を加へ得るやうになつてゐる。けれども其の統制の重心は取引所の内部管理に手を觸れんとするのではなく、又一般公衆の投機取引に干渉せんとするのでもない、唯一に職業として證券取引に従事するものに干與の手を延ばしてゐるに過ぎないのである。

労働者心理學の體系概観

藤 林 敬 三

目 次

- 一、労働者心理學の對象とその環境心理學的考察
- 二、労働者心理學の基本的問題と體系
- 三、労働者の生活環境
- 四、労働者の生活形態と生活態度
- 五、労働態度
- 六、労働者の個性の諸類型とその類型的研究の意義
- 七、労働者心理學の實踐上の問題
- 八、結 び

労働者心理學は労働者の現實の精神生活を對象とする應用心理學である。

現實の精神生活の理解は個性の環境との關聯に於いてのみ可能である。換言すれば人の精神生活は全體的、統一的個性の顯現であり、それが生活を廻る環境と關聯して理解せられる場合に、吾々は初めて現實の精神生活に觸れることが出来る。従つて現實の精神生活を問題とすることは、環境との關聯に於ける個性を問題とすることであり、この意味に於いて、労働者心理学が労働者の個性を對象とする応用心理学である、とも云ふことが出来る。更に内面的精神生活が客觀的に表現せられるといふ點から觀れば、労働者の日常生活姿態は彼等の現實の精神生活の、従つて彼等の個性の、環境との關聯に於ける具體的な表現である。そして一般に他人の精神生活を直接經驗し、これを認識することが不可能である心理学に於いては、他人の現實の精神生活をその客觀的表現である、彼の日常生活姿態に於いて理解するといふ方法を採らねばならないのは勿論であるが、この方法的立場から離れて、別に吾々はまた應用心理学の實踐的立場から、人の日常の行動、その生活姿態——後に論ずるやうに、筆者はこれを生活形態及び生活態度として理解する——を、その内面的精神生活、従つてまた個性との關聯に於いて、問題とすることが重要である。かくてこの意味に於いては、労働者心理学はまた労働者の生活形態及び生活態度に關する應用心理学である、と云ふことも出来る。これを要するに、労働者心理学は労働者の内面的精神生活とこれの客觀的表現である彼等の日常の生活行動とを對象とする。そしてこれ等の對象は彼等の個性の顯現であり、表現である。かくて労働者心理学は労働者の生活に關する現實の人間研究を行ふ心理学である。以上述べた労働者心理学の對象は、これを簡単に示せば、次ぎの如くである。

個性 || 精神生活 || 生活姿態 / 生活形態
環境

此處で個性と環境との關聯に關して尙ほ少しく附言して置く必要がある。

各人の精神生活は現實には、同じことであるが、各人の日常生活に於ける精神生活は各人各様である。このことを心理學的には個性の差異に基づくこと云ふ。然らば各人の個性の差異は如何にして發生するか。今日心理学の大體通説となつてゐると見做される見解——勿論これに反對説が皆無であると云ふのではないが——である。W. Sternの輻輳説 Konvergenztheorie に従つて云へば、各人の個性はその兩親の個性の遺傳的素地の上に、生後の生活諸環境の影響の下に變化し、發展し來たものである。更らに兩親の個性は遺傳的にはその各々の兩親の個性に基づく。従つて一般に各人の個性はその父祖の個性の遺傳的素地の上に生活環境の後天的影響に依つて辨證法的に變化發展し行くものであると見做される。其處で各人の多様な現實の精神生活とその生活姿態とを充分理解し得んがためには、吾々は各人の個性の遺傳的素地を一方では明かにし、他方では個性に對する生活上の過去並に現存の諸環境の影響を明白にしなければならぬ。一言にして云へば、各人の個性はその現在に及ぶ生活史的考察に於いて明かにせられ得る。そして個性に對するこの理論的な研究は、結局各人の現在の生活環境を人爲的に調整することに依つて、今後環境の個性に對する影響を好都合のものとし、各人の個性の圓滿なる發展を企圖するといふ實踐的目的に應ずるものである。(註一)以上述べた所を簡単に示せば次ぎの如くである。

父祖の個性 → (遺傳) (發展) → 個性 → 精神生活 → 生活姿態

(影響) (影響)

過去環境 → 現在環境 → 環境調整(應用心理學的實踐)

註一 應用心理学は總て個性の發展に關する環境影響の人為的調節を目的とする云つていゝのであるが、個性に關する科學的實踐は單に應用心理学に限られるのではない。即ち吾々は、優生學がまた個性の遺傳に關して應用心理学と同様の實踐的目的に従ふものであることを、記憶して置くことも必要であらう。更らに筆者は應用心理学の實踐的問題を右の如く環境の人為的調整に求むべきものと考へるのであるが、從來應用心理学者の見解は必ずしも筆者の見解と等しくない。多くの應用心理学者の見解に於いては、シュテルンの輻輳説が是認せられてゐても、そして個性の變化發展に關する環境の後天的影響が理論上認められて居ながら、その研究に於いて個性に對する環境影響を科學的に確證しやうとする努力が著しく欠けてゐる。その結果は當然應用心理学の實踐的問題が吾々の場合とは異なる方面に求められてゐる。例へば吾國の應用心理学者達はこのために單に各人の個性をその種々なる心理的機能に於いて確め、且つこれを評價し、人間力の合理的利用を以つて應用心理学の實踐的目的であるとしてゐる。筆者が能率心理学と呼ぶものはこの立場を最もよく現はしてゐるのであるが、かくの如き應用心理学は種々なる方面から批判されねばならない。筆者は從來屢々この意味の應用心理学並に能率心理学を批判して來たのであるが、最近また別の機會にこれを批判して置いたので、これを此處に繰り返すことを省略する。が環境の個性に對する影響の問題を除いては、應用心理学の成立は根本的に否定されねばならないといふのが筆者の見解である。そしてこの意味の應用心理学の成立は、個性に對する環境の影響を單に理論上認めてゐたに過ぎない從來の個性心理学に基づいては不可能であつて、環境影響を問題とする所謂「環境心理学」 Milieu-psychologie の發

展に俟たなければならない。

更らに個性に對する環境の影響に就いて多少述べて置く必要がある。

個性に對する環境の影響は三つのものに區別し得る。筆者はこれを環境の開發作用、制約作用、及び形成作用と呼んで置き度い。その開發作用とは刺戟としての環境が個性的反應を開發する作用を云ひ、その制約作用とは個性的反應を多少の程度に於いて一定の規道、或は形態に強制する作用を謂ふ。換言すれば環境の制約作用とは環境に對する個性の順應を要求するものであると云つてもいゝ。従つてこの制約作用の存する限り、そして個性の環境に對する順應が圓滑に行はれない限り、個性と環境との關聯に多少の緊張關係が存在することとなる。かくて此處に個性の情意的方面が最も強く現はれるのであつて、通常生活感情の問題が提起せられるのは、この緊張關係に關聯してである。第三の環境の形成作用とは個性の構造變化を生ぜしめるものを謂ふ。——通常環境の個性に對する影響と稱せられるものが専らこれであるが、それが不鮮明な表明であることは右の序述に依つて明かであらう。——先きの環境の制約作用がその環境の除去と共に消去するのに對して、その形成作用は個性に對する基底的影響であつて、その環境の除去は同時に形成作用の消去ではない。吾々が個性の生活史的考察に於いて個性に對する過去環境の影響を問題とするのは、専ら過去環境の個性に對する形成作用を理解することである。

然らば環境の個性に對するこの形成作用は如何にして成立するか。時にこのことは個性に對する一定環境の存在の恆常性に於いて、或は個性と環境の接觸の頻度の大きなることに於いて説明され、また個性と環境との關聯の内面

的緊密度に依つて説明せられやうとしてゐる。しかしこの孰れの説明も未だ充分ではない。環境の恆常性と、個性と環境の接觸の頻度とは單に客觀的な事情を考慮するに過ぎないのであつて、——尙ほ偶然的、一時的環境の存在が個性に對する形成作用を持ち得ることを否定し得ないとすれば、この説明は普遍的には採用し難い。——心理學的には個性と環境との關聯の内面的緊密度に於いて形成作用を説明することの方が勝つてゐる。しかもこの後の説明に於いては却つて環境の無意識的影響が説明し難い。其處で吾々は凡そ次ぎの如く理解することがより適當であらう。即ち、前者の寧ろ生物學的説明たる、環境の恆常性及び個性と環境の接觸の頻度は個性に對する環境の無意識的影響の條件であり、これに對して後者の個性と環境の關聯の緊密度はその意識的影響の成立の基礎である。

以上の如く個性に對する環境の影響は、環境の開發作用、制約作用、及び形成作用の三作用として區別せられるが、一般に個性と環境との關聯は、個性を中心にして考へれば、個性の環境に對する受動的關係とその能動的關係の二面に於いて理解せられる。そして筆者は個性の客觀的表現である各人の日常生活姿態を、環境に對する個性の受動的關係としてこれを理解する場合に生活形態と云ひ、これに對して環境に對する個性の能動的關係に於いてこれを理解する場合に生活態度と謂ふ。しかし此處で讀者の誤解を招かないやうに若干の注意を與へて置くことが必要である。

第一に、吾々が生活態度と生活形態とを右の如く區別するのは、環境との關聯に於いて個性に二つの相を識別することである。従來心理学に於いては精神的機能を分つて知、情、意となし、個性心理学に於いてはこの三分類に

應じて、個性を知能、氣質、性格——但し論者中には氣質と性格とを區別せず、これを性格に統一して考察しやうとするものが多いのであつて、これに従へば個性は知能と性格に二分せられる。——として考察するのが普通と見做されてゐる。しかしそれは尙ほヴント流の構成心理学に於ける精神生活の寄木細工的考察の影響を多少ともに留めるものであつて、筆者は寧ろ環境との關聯に於いて個性の受動相と能動相とを區別することが、遙かに現實的人間研究として吾々の心理學的考究に於いて妥當であると考へる。

第二に、従來生活形態及び生活態度なる言葉は多くの論者に依つて屢々用ひられる所であるが、必ずしもこの兩者が明瞭に區別せられては居ない。(註二) 其處で特に讀者に注意して戴き度いのは、吾々が生活形態と云ひ、生活態度と謂ふ場合には、吾々はこれを各々別個の生活姿態に於いてこれを認識しやうとするのではなく、同一の生活姿態を生活環境と關聯してその受動的意味に於いて理解するか、またその能動的意味に於いて理解するかにかゝるのである。そして同一生活姿態をかく二様に理解し得ることは、先きに述べた所に依つて明かであるが、吾々はまた後に述べるやうに生活形態と生活態度とを區別することが、實踐的意義に於いても重要であることをも忘れてはならぬ。

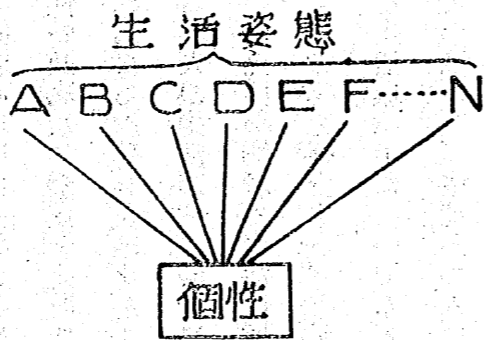
註二 生活形態並に生活態度に關しては、例へばシュプランガーの有名な著作に「生活諸形態」(E. Spranger, Lebensformen,

5. Aufl., 1925.)があり、ギーゼはその平均人の類型學に於いて、普通人の「精神的な生活形態」Die geistige Lebensformを

問題としてゐる。そしてこれ等の例に於いては生活形態と生活態度とが未だ區別せられることがない。これに對してハル

クナト以後の労働者心理学の研究に於いては、屢々労働の苦痛或は喜悅が問題とせられて來て居り、またエリアスベルクは労働の動機づけ Motivation を問題としてゐるのであるが、これ等は専ら個性の能動相を問題とし、特に労働の生活態度に關するものと云つていい。更らにウォルトは職業的生活環境に關聯して労働者心理学の問題を次ぎの如く提起してゐる。即ち、「労働者は彼の職業生活を如何に體驗するか。彼の労働の環境は彼の精神的態度と彼の意識に如何に反映するか。彼の職業は彼に對して一定の内的生活形態を與へるものであるか」と。(圈點筆者)ウォルトはかく明かに生活態度と生活形態とをその内的状態に於いて區別してはゐるが、これに對して明確な説明を特に附加してはゐない。

第三に、生活態度と生活形態とを區別すること、先きに述べた環境影響の三作用とが如何に關聯して考へられるか。筆者は嘗つて、「労働者の現實的な生活の諸方面を構成的、分析的、靜態的に觀れば、それは生活形態の問題であり、更らに機能的、総合的、動態的に觀れば、それは生活態度の問題である」と述べたことがある。今これを多少補正して、先きに述べた個性の二つの相をより具體的に説明し、併せて環境影響の問題を取り擧げて置かう。生活諸態度は全體的、統一的個性の客觀的表現である。換言すれば日常生活上の諸態度は各々環境との關聯に於ける個性の能動的な表現である。しかし其處に個性の表現として客觀的に現はれてゐる生活諸態度は環境影響、即ち環境の開發作用、制約作用、及び形成作用の所産であつて、この意味に於いて生活諸態度は全體が個性の環境に對する受動相を示してゐる。そして生活形態はこの生活諸態度に依つて構成される。これに對して吾々は生活態度を次ぎのやうに考へる。個々の生活態度は各々統一的個性の能動的性質を體現してゐる。従つて吾々はこの個々の生活態度から能動相に於ける個性の統一的性質を理解することが出来る。換言すれば、個々の生活態度を可能にする



る個性の統一的理解に於いて生活態度が明かにせられる。しかもこの個性たるや既に過去(並に現在)環境の形成作用を受けて居り、現在環境の開發作用に應じて反應し、その反應の過程に於いて現在環境の制約作用を時に蒙るものである。これを要するに生活諸態度は環境に對する個性の受動相の客觀的表現であり、同時にそれは個性の能動相を體現するものである。更らに上に簡單に示した所に従つて云へば、生活形態はABC...Nの生活諸態度の全般に互り、個性の多面的表現の認識に基づき、生活態度はこれ等の生活諸態度を可能にする能動的、統一的個性の理解に於いて考へられる。

以上筆者は個性と環境との關聯を論述して來たのであるが、それは更らに次ぎの如き見解に支へられねばならない。即ち個性と環境、従つてまた人と環境の關聯は一つの全體構造を形成してゐる。—A. Busemann は人 Person と環境 Milieu の關聯の全體性を明かにせんがために、人と環境とが「環境II人格體系」M-P-System を構成すると謂ふ。—そしてこの人と環境の關聯の全體構造は靜止的ではなく、可變的であり、運動的であり、しかもその運動の中心は個性にある。かくて個性の辨證法的發展はこの全體構造の裡に行はれる。環境が人を作ると同時に、人は彼自身の環境を持ち、また彼自身の環境を創り出すものである。更らに人と環境のこの全體構造から云へば、人の日常生活態度がこの全體構造の客觀的表出であり、其處に吾々が人の生活形態と

生活態度とを認識することは、この全體構造に於いて彼の個性を理解することである。

二

前節に於いて、筆者は労働者心理学の對象とこの對象に關する環境心理學的考察——これが日常生活に於ける人間の現實的研究であるといふ意味に於いて、筆者はまたこれを「生活心理学」の研究とも云ふ——を簡単に論述した。そしてこの論述中に既に吾々の基本的問題が指示せられてゐるのであるが、更らにこれを簡単に云へば次の如くである。

労働者心理学は究極各労働者、或は一集團の労働者の生活の現在環境を人爲的に調整することに依つて、各人の個性の圓滿なる發達を企圖するといふ實踐的目的に従ふ研究からなる。従つて現在の生活環境が労働者各人の個性に如何なる影響を及ぼすかを明確にすることが必要である。しかしこの問題は單純には解決され得ない。第一に労働者各人の生活環境が嚴密には總て同一ではなく、且つそれが複雑多岐なる環境諸因子から成つてゐる。従つて吾々の研究は労働者の生活環境中の一定の環境因子、或は多數の環境諸因子の一定の布置状態たる特定環境の個性に對する影響を確證する、と云ふ方法を採らなければならない。しかもこの一定環境因子、或は特定環境の影響はそれを生活環境中に持つてゐる總ての労働者の個性に、必ずしも一義的に且つ齊一に現はれてゐるのではない。蓋し人と環境の全體構造が各人に於いて必ずしも同一ではなく、従つて一定環境因子、或は特定環境のこの全體構造に於いて持つ意味に相違があると考へねばならないからである。従つて吾々は一定環境因子、或は特定環境の個性に

對する影響を明かにするためには、常に各人の環境との全體構造に於ける他の環境諸因子の存在とその個性に對する影響とを適當に考慮する必要がある。第二に一定の環境因子、或は特定環境が人と環境の全體構造の裡に於いて持つ意味が異なるといふことは、この全體構造の中樞をなす各人の個性の差異に基づく。従つて一定環境因子、或は特定環境の各人の個性に對する影響の相違は、更らに各人の過去の生活史的考察に於ける生活心理學的研究に依つて補足されなければならない。これが労働者心理学の研究に於ける基本的問題であつて、右の第一及び第二に補足された問題を輕視することは、從來の労働者心理学の研究に於いて屢々見られる所であるが、それは研究をして未だ充分確實なものたらしめる所以ではない。

筆者は労働者心理学の研究に於けるこの基本的問題を、次ぎの如き系統的研究の諸分野を通じて明かにして行く處に、労働者心理学の全貌を明かにすることが出來ると考へる。そして次ぎに示す研究の諸分野が労働者心理学の體系を構成する。即ち

- (1) 労働者の生活環境
- (2) 労働者の生活形態及び生活態度
- (3) 労働態度
- (4) 労働者の個性の諸類型
- (5) 環境の調整

次節以下に於いてこれ等の諸研究分野の概要を傳へる筈であるが、これに先き立つて豫め若干の注意を加へて置くことが便宜である。第一の労働者の生活環境に關する研究は現在環境に關するものであつて、右に述べた労働者心理学の基本的問題の前段階を構成する。そしてこれを特に問題とする所以は生活環境を構成する諸因子が甚だ複雑であることに據る。第二の労働者の生活形態及び生活態度に關しては、既に前節中にも觸れて置いたので、此處にこれを繰り返す必要はないが、現實的人間研究としての労働者心理学のこれが中心問題であることだけは、記憶して置いて戴き度い。第三の労働態度の研究を特に擧げた理由は、凡そ労働者が二つの特定生活環境の裡に生活し、即ち經營環境と經營外の環境とに於いて職業人としての生活と一般社會人としての生活とを營んで居り、その職業人としての生活が文化的に他の階級のものから區別して特に重要視せられるといふにある。(註三) 第四の労働者の個性の諸類型は右の第二及び第三に於ける生活態度の研究の理論的歸結であり、且つ實踐的問題と關聯して特に重要視されねばならないものである。最後の環境の調整に關してはその重要性を更めて指摘するまでもなからう。

註三 筆者の觀る所に就いて云へば、一般に各特殊應用心理学は特殊文化領域に於いて各々成立すべきものである。特殊の文化領域は一方では過去の文化的活動の所産としての一定の文化的、社會的制度、施設、作品等の客觀的存在と、他方ではこれと關聯する特定人の文化的活動とからなる。其處で各應用心理学の問題は(1)この特定個人に關する生活心理学であり、また(2)特殊文化的所産の一般社會人、或は特定人に對する環境心理学的研究を含む、と考へていゝ。しかし特定個人の文化的活動が専ら人に向けられてゐるか、その活動の對象が物に存するかに従つて、各應用心理学に於ける右の二つの問題の孰れかより重要なものとなる。例へば藝術活動、經濟活動の如きは主として活動對象が物に存するが故に、藝術

心理学、經濟心理学——労働者心理学はその重要な一部門を構成する——に於いては、右の(1)の問題として藝術家の生活心理学が、經濟活動を營む者の、従つて労働者心理学に就いて云へば、労働者の生活心理学が主内容を構成する。これに對して教育心理学、宗教心理学等に於いては教育家、宗教家の生活心理学が當然問題とせられ得るが、彼等の活動對象である信仰者、被教育者特に兒童に對する(2)の問題がより重要なものとせられる。そしてこれ等總ての應用心理学を通じて、特に重要視せられる問題は特殊の文化活動に對する人の精神的態度の問題である。即ち、教育心理学にあつては被教育者としての兒童の學習態度が教育家の教育態度の問題と共に重要視せられ、宗教心理学にあつては信仰の態度が、藝術心理学にあつては藝術家の創作態度が各々重要視せられる。これと同様にして労働者心理学にあつては労働態度が一つの重要問題を構成する。そして従來各應用心理学に於いてこれ等の特殊文化的な生活態度が専ら重要視せられるのは、文化的意義に於ける個性の伸展を企圖する應用心理学に於いては、誠に當然であると云はなければならぬ。しかし此處に序に注意して置くべきことは、第一に應用心理学の實踐的目的は一般に個性の發展にあつて、且つそれは單に特殊生活態度に於ける個性に限られべきではなく、また第二に理論的に云つても特殊生活態度の問題を明かにするために、一般に個性の構造を全體的に理解することから始めなければならないといふ點である。かくして吾々の労働者心理学にあつては、筆者は先づ労働者の生活形態及び生活態度の研究に於いて労働者の個性を全體的に理解し、然る後に特殊生活態度としての労働態度の問題を提起することが妥當であると考へる。

三

労働者各人の生活環境をその現在は素より過去に渡つてこれを明かにすることは、労働者心理学研究の前段階をなす。そして此處では専ら労働者の生活の現在環境を問題とする。しかしそれは過去環境の影響を輕視することを

意味しない。

筆者は先きに労働者の生活環境の研究を労働者心理学體系の第一に挙げた理由として、生活環境が複雑多岐であることを附言した。しかしそれは更らに補足して次ぎの如く云はるべきである。吾々が労働者の生活環境を先づ一般的に問題とすることは、労働者心理学の個別的、具體的研究に對する研究嚮導的意義を持つに過ぎない。蓋し労働者の生活環境をそれ自體明かにすることは全く無意義であり、且つ労働者各人の生活環境は嚴密には總ての個人を通じて全體的に同一ではない。そしてこのことは既に人と環境の全體構造とその全體構造の差異から明かであつて、吾々は個々の具體的研究に於いて労働者各人の生活環境を現實的に明かにしなければならぬ。しかし各人の生活環境が複雑多岐であるが故に、個々の具體的研究に於ける生活環境の鮮明を遺漏なからしめ、その研究を充分ならしめるために豫め一般的にこれを提示して置くことが、多少の意義を持つこととなる。

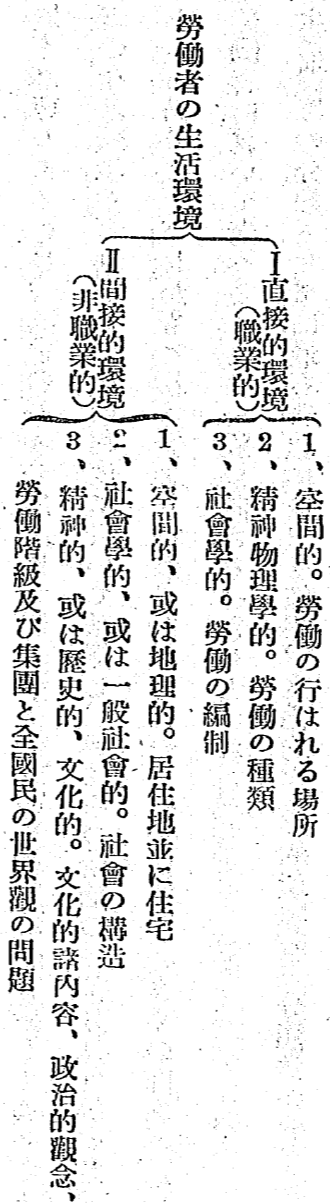
既にかくの如く、單に研究嚮導的意義に於いて労働者の生活環境を豫め一般的に明かにしやうとする企圖から云つて、それが専ら現在の生活環境に限られることが望ましい。そして労働者各人の過去の生活環境に就いては現在環境に關する吾々の一般的所見が多少の示唆を與へる。しかし労働者各人の過去の生活は多種多様であつて、この多種多様な過去の生活に於ける複雑多岐なる環境諸因子をその一々の場合に就いて明かにすることは、元來研究嚮導的な意義を遙かに超へたものである。

右の如き理由に従つて吾々は左に専ら労働者の生活の現在環境を一般的に問題とする。しかし尙ほ讀者の注意を求めて置く必要のあるのは、次ぎの吾々の所論は大體工場労働者の生活環境を豫定してゐることであり、従つて特殊労働者の生活環境がこれから多少の程度に於いて乖離し、或はその所論の一部分は何等の意義をも持たないことがあるといふ點である。しかもこれは素より當然であり、且つ労働者に關する多くの問題に於いて、今日吾々が先づ工場労働者に就いて考へることは一般に許さるべきことである。

從來生活環境の分類としては最も普通には、自然的、文化的、人間的環境の三分類法が存すると云つてゐる。——但しこの内文化的並に人間的環境に就いては、その各々に分類される個々の環境因子に關して諸家の見解に多少の相違がある。——そしてこの三分類法は吾々の場合にも全く價值なしとしないのであるが、それは餘りに一般的な分類であつて、特殊環境心理學的研究である労働者心理学の研究にあつては、吾々は更らに労働者の生活により現實的な環境分類を行ふ必要がある。既に現はれてゐる若干の見解に従へば、労働者の生活環境は大體(1)職業的環境と(2)非職業的環境に二分せられてゐる。R. Woldt はこれを「經濟的環境」と「社會的環境」と云ひ、H. de Man は「作業環境」と「生活環境」と謂ひ、更らに A. Fischer は「直接的(職業的)環境」と「間接的(非職業的)環境」とを區別してゐる。先づ吾々はこれ等の見解に對して、その名稱と内容の如何は暫らく措いて、その妥當なるを認めねばならない。蓋し労働者は一般にその日常の生活に於いて労働の、即ち職業的生活と非職業的生活とを繰り返して營んでゐるからである。

しかし右に挙げた諸家の見解に於いては、その名稱と共に全體として尙ほ彼等の環境分類には少なからざる不満

がある。例へばウォルトは右の二つの環境の外に、別に労働者の集團生活、即ち産業組合(生産並に消費組合)、政黨、労働組合を擧げて、これ等の労働者各人に對する集團心理的影響を重要視しやうとしてゐる。しかし環境分類を統一的ならしめる點からは、これ等は寧ろ彼の謂ふ社會的環境中に含まるべきものであらう。またドウ・マンは彼自身心理學の見解に於いて、反應主觀と環境との關係から労働者の精神生活を理解しやうとするものであつて、しかも彼の謂ふ反應主觀とは素質として考へられ、その素質を分つて彼は(1)人間の本性(人種的、先天的、正常的、社會的に平均的、恆常的傾性)と、(2)文化的遺傳的素質(歴史的素質)——宗教的信仰、社會的、義務的感情、權利平等の信念——としてゐる。しかし吾々は彼の謂ふ素質中特に歴史的素質が遺傳的基礎に於いて理解せられるか否か、に關しては甚だ疑問である。歴史的素質は素質ではなくして寧ろ環境心理學的精神現象と見做さるべきものである。ドウ・マンはこの見解のために彼の環境分類中にこれに特に關聯する生活環境を全く除外して了つてゐる。ウォルト及びドウ・マンの見解に比すれば、フィッシャーの見解は遙かに整備してゐる。彼の分類は次ぎの如くである。



右のフィッシャーの見解に對しても筆者は尙ほ多少の疑問を持つてゐる。第一に彼は二つの環境を直接的、間接的と呼んでゐるが、それは少くとも不適當である。吾々が若し労働態度をのみ問題とするならば、一見かくの如く呼ぶことが適當のやうに思はれるが、それは環境影響中單に開發作用と制約作用とに關してのみ妥當する。そしてより重要な形成作用に就いては吾々は直ちにかくは斷定し得ないのである。即ち労働者各人の個性、從つてまた特殊生活態度としての労働態度が職業的環境から直接的な影響を受け、非職業的環境から間接の影響を蒙ると斷定することは少くとも危険である。況んや吾々の問題が單に労働態度の研究に限られず、一般に労働者の個性を明かにするにあるとすれば、彼の如く呼ぶことの不適當なることは更らに明かであらう。

第二にフィッシャーはその環境分類中Ⅱ3に觀念的なものを擧げてゐる。これと同様のことは、例へばある工場に、或はその内のある職場には特異の氣風 *Morale* があり、特殊の精神的雰圍氣があつて、これが其處に働く労働者各人に精神的に影響するといふことが、工場の實際家に依つて、また最近では應用心理學者に依つて認められてゐる。しかしかくの如き觀念的なものゝ存在をそれ自體に考へることは、些か形而上學的であるといふ非難を免れない。吾々は人を離れてかくの如き集團意識の存在を認むべきではなく、それを各人の個性の裡に生活心理學的に理解しなければならぬ。かくてかくの如き觀念的なものを環境因子として擧げることが、筆者の直ちに賛成し得ない所である。

以上の如く労働者の生活環境の分類に關しては諸家の見解に尙ほ多少の欠點はあるが、大體職業的環境と非職業

的環境の二分類は吾々もこれを認めねばならない。しかし尙ほ少くこれ等の見解を見ると、その非職業的環境中には二つの區別すべきものが含まれてゐる。即ちウォルトはその社會的環境中に國家を擧げてゐるが、一般に一國の政治、經濟狀態——ウォルトはまたその經濟的環境中に社會の經濟組織を擧げてゐるが、これは勿論非職業的環境中に考慮さるべきものである——といふが如きは、非職業的環境中の他のもの、即ち労働者の自由時間の消費に關聯する環境諸因子と適當に區別さるべきである。そして筆者は寧ろ社會學にはこの一國の政治、經濟狀態に關するものを別に分類して「一般的社會的生活環境」として、これを職業的環境と非職業的環境に對列することが遙かに適當であると考へる。かくて筆者は労働者の生活環境を三分し、

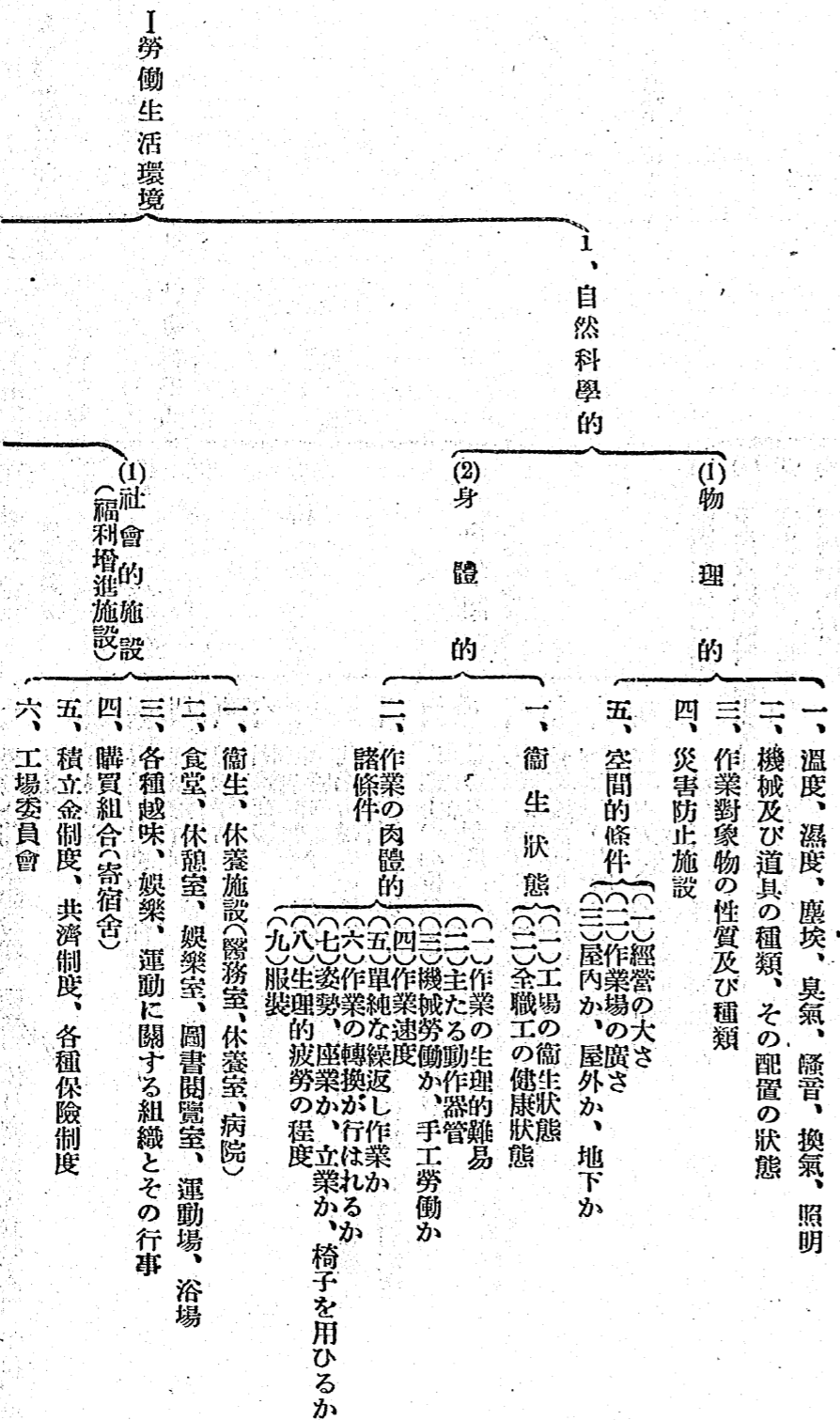
I 經營環境、或は労働生活環境(職業的生活環境)

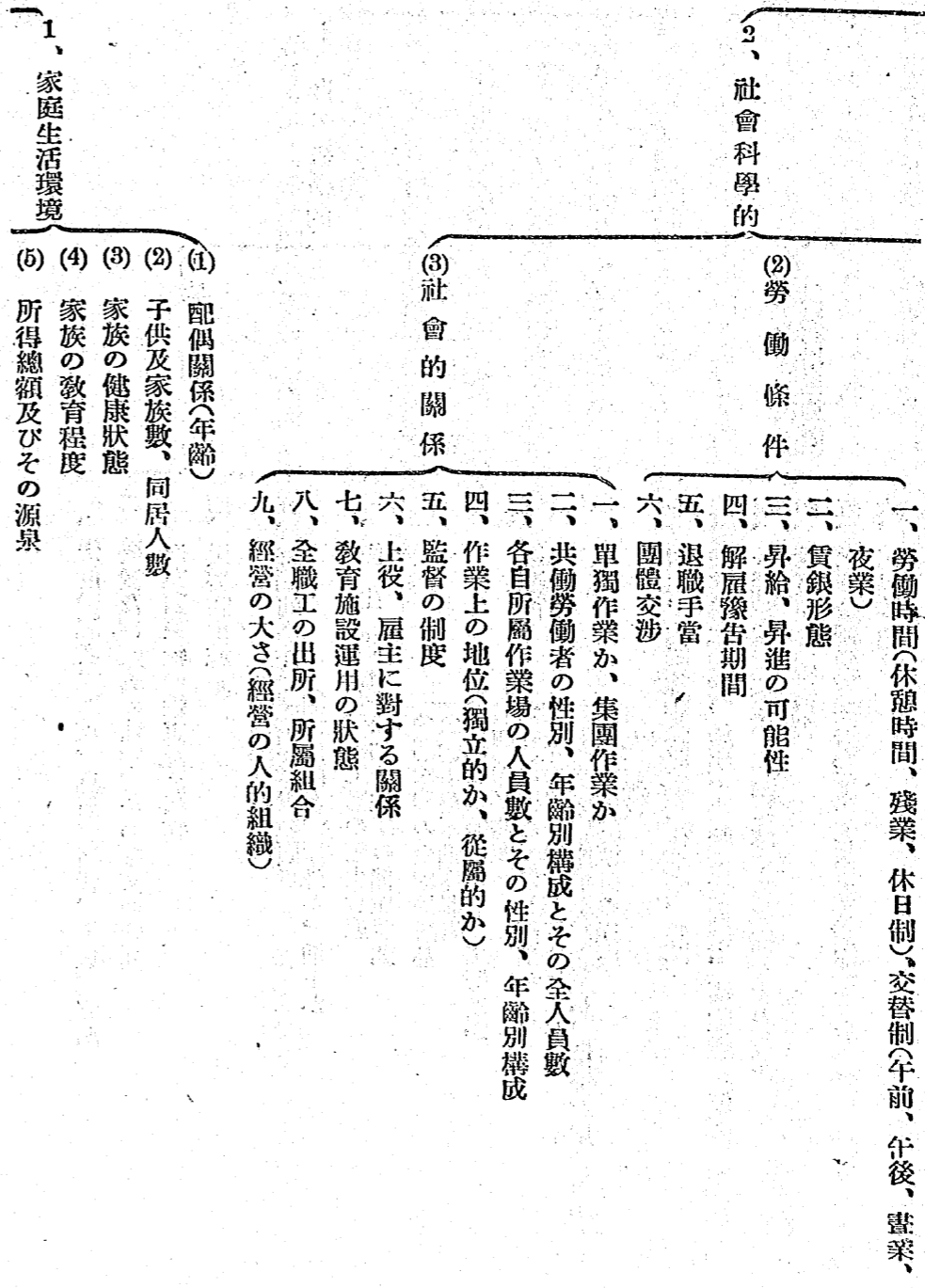
II 經營外環境、或は文化的生活環境(非職業的生活環境)

III 一般的社會的生活環境

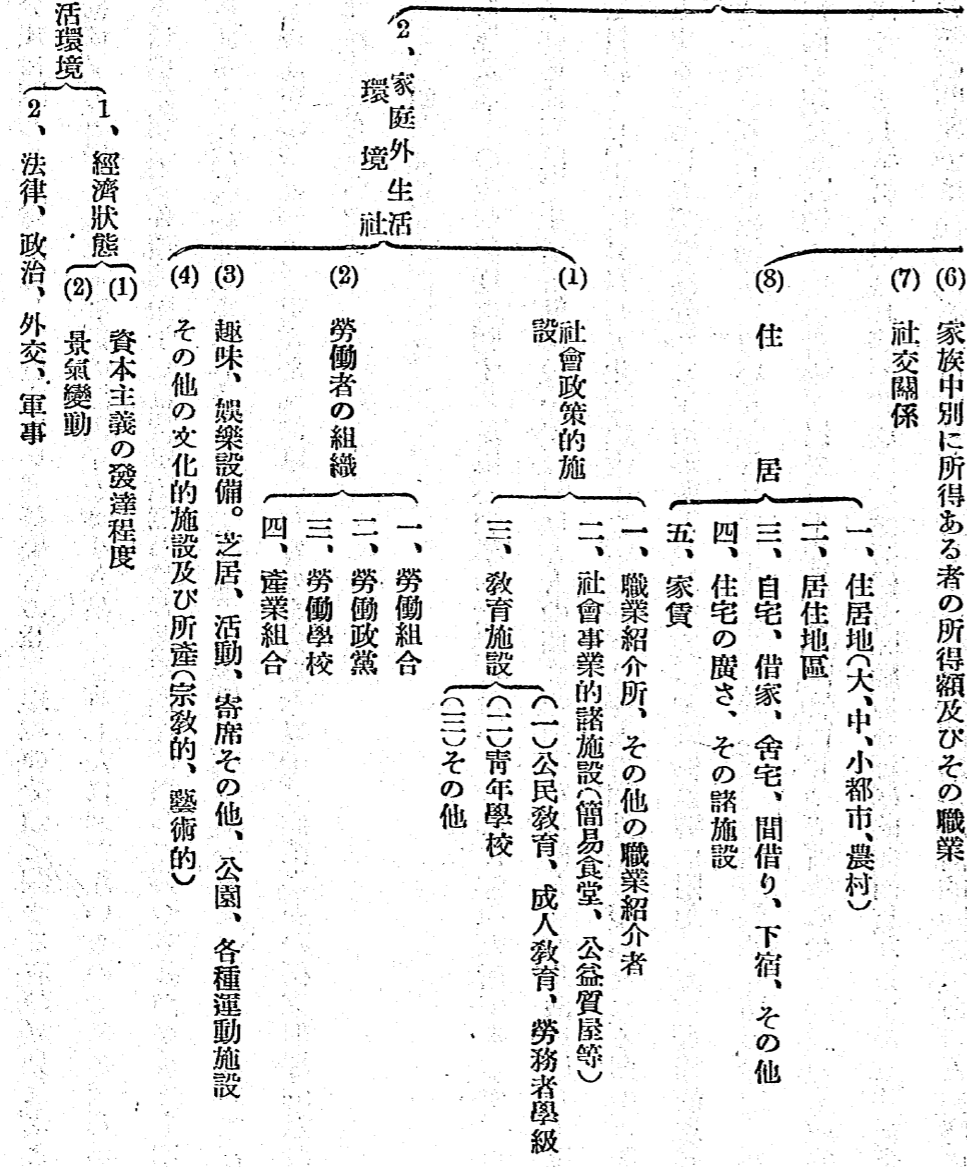
とする。次いでこの各々のものに屬する環境諸因子を列擧し、これを適當に再分類して一般の參考に供すれば、凡そ次ぎの如くである、

労働者の生活環境





II 文化的生活環境



III 一般的社會的生活環境

最後に右の環境分類に關して一言附加して置き度い。労働者の生活環境の分類に關する右の私見は素より單に労働者の生活環境を構成すると考へられる客觀的諸因子を多少整然と排列したに過ぎないものである。しかし元來吾々が此處に企圖する環境分類が、各環境因子或は特定環境の労働者の個性に對して持つ意義が多少とも明かにせられた後に、考慮せられることが遙かに望ましい。しかも今日までの労働者心理學の研究の發展に於いては、未だ充分このことを期待し得ないのであつて、現在吾々は單に右の如き分類を以つて尙ほ多少の研究嚮導的意義を持つものとして満足しなければならぬ。

四

労働者の生活形態及びその生活態度に關する環境心理學的意義に就いては既に述べた所であるが、再び此處に別の言葉を以つてこれを云へば、生活形態に於いて吾々は各人の個性の種々なる面をその生活に即して現實的にこれを認識することを目的とし、これに對して生活態度に於いて吾々は各人の個性のこの種々なる面の可能的、統一的素地を明にせんとする。そして筆者は先きに生活形態と生活態度の理論的區別に附加して、實踐的意義に於いても亦この區別の重要であることを指摘して置いた。それは一言にして云へば、生活形態の問題に於いて吾々は労働者の生活の個々の部面を現實に問題とすることが出來、生活態度の理解に從つて彼等の生活問題の全般的素地を問題とすることが出來る。そして吾々のこれ等の問題は所謂労働者問題の心理學的側面をなしてゐる。從來屢々「労働者問題は單に胃の腑の問題ではない」と云はれるが、正しくは労働者問題が經濟的問題であると同時に心理學的問

題であると云はねばならない。過去に於いて心理學は現實的人間理解の方法を全く等閑に附し、心理學者の多くは現實に人間を理解する方法を知らなかつた。労働者問題が物質の問題であると同時に人間の問題である以上、心理學者は彼に許された方法に從つて人間の問題として労働者問題に近づかねばならない。

更らに筆者は先きに一般に生活態度と生活形態の區別が從來充分明かにされてゐないことを指摘して置いたが、これを具體的な一例に就いて此處に示して置くのも決して無意義ではなからう。先年「墺國經濟心理學研究所」の手に於いて、ウキーンに近い一小工業都市「マリエンタール」の失業者に關する甚だ慎重にして、且つ吾々の範とすべき労働者心理學的研究が行はれた。そしてこの研究に於いて最初に擧げられた主要問題は次ぎの如くであつた。

A 失業に對する態度

- 1、失業に對する最初の反應は何であつたか
- 2、各個人は職を見出さんがために如何なることを爲したか
- 3、何人が別の處で職を見出し、且つ如何なる方法を以つてそれを見出したか
- 4、労働に代つて如何なる事が爲されてゐるか。例へば小動物の飼育、耕作等
- 5、偶々存する労働の機會、特に國外移住の問題に對する態度
- 6、行爲の類型と形相
- 7、尙ほ人々は如何なる計畫を有してゐるか。また成人と青年との間に於けるその相違は如何

- 8、また労働に従事してゐるものと失業者との間のその相違は如何
- 9、社會救済事業に對する關係は如何
- 10、尙ほ如何なる餘計なことが爲されてゐるか

B 失業の影響

- 1、人々の健康状態に對する影響
- 2、兒童の學業成績に對する影響
- 3、犯罪に對する影響
- 4、失業の影響をより強く受けてゐるものは、兒童中歳上のものであるか、歳下のものであるか
- 5、労働に再び従事するとして、その場合の困難さが既に現はれてゐるか
- 6、政治的對立が強化されたか、或は輕減せられるに至つてゐるか
- 7、宗教に對する態度が如何に變化してゐるか
- 8、一般的な興味の推移が既に現はれてゐるか
- 9、時間の評價が如何なる變化を蒙つてゐるか
- 10、住民相互の關係が如何に變化してゐるか。喜んで他人を扶助せんとするか、他人と争ふか
- 11、家庭内に於ける家族のものゝ間の關係の變化

右に擧げられた研究項目は總て失業者の(また彼の家族、例へば兒童の)日常生活諸姿態として客觀的に現はれてゐる。従つて吾々は先づこれ等を失業者の生活形態として理解し、次いで彼等の生活態度を明かにするといふ研究態度に出でなければならぬ。そして彼等の生活形態に於いて吾々は失業といふ環境變化の影響をその生活の個々の部面に就いて現實に確證し——但しB、1は副次的環境變化の問題であつて、それは直ちに失業者の個性の問題ではない——彼等の生活態度に於いてその生活諸姿態を全面的に可能にしてゐる統一の個性の特質を理解し、且つこの特質が果して失業に依る環境變化の影響であるか否かを問題としなければならぬ。そして最後に失業に對する、換言すれば労働の機會を新に見出さうとする彼等の態度、謂はゞ失業に對する特殊の生活態度を問題としていふ。しかし後にも論ずるやうに、一般に個別的な生活態度或は特殊生活態度は、理論的には一定環境因子或は特定環境に對する一般的生活態度の顯現である、と考へねばならない。かくの如き吾々の立場から見ると、右に示した失業者の研究に關する主要問題の提起は先づ生活形態と生活態度の區別を明確にして居らず、第二に特殊生活態度としての失業に對する態度の問題を充分よく理解してゐないと云はねばならない。この第一の批評點に就いては重ねて云ふ必要もないが、第二の點に就いては、例へばA 4、9、及び10の三つの生活姿態は如何にして吾々が其處から失業に對する態度を直接理解し得るか甚だ疑問である。かくの如き諸項目が加へられてゐることは、特殊生活態度の理解を疑はしめるものであると云つてよい。

此處で先きに述べて置いた生活形態と生活態度、更らに一般生活態度と特殊生活態度に關して多少の補足的説明

を加へ置かう。

各人の日常の各々の行動、即ち各個別的な生活態度は、一定の環境因子或は多数の環境諸因子から構成されてゐる特定環境の影響の下に各人の個性の反應に依つて成立する。この反應に於ける個性の能動相を吾々は個別的な生活態度と呼ぶ。そして各人の總ての生活態度に於いて個々に理解せられる個別的な生活態度から、吾々が一般的生活態度を理解し得るとする理由は、正常なる人間の場合にあつては人格の統一が豫定せられ得るにある。従つて理論上逆に云へば、統一的個性が個々の環境條件に對して能動的に働きかける場合に、個別的生活態度が理解せられ、従つて個別的生活態度は常に一般的生活態度をそれ自體の裡に含んでゐる。従つて一般的生活態度は個別的生活態度を通じて認識され得る。更らに吾々が特殊生活態度と呼ぶものは多くの場合に若干の個別的生活態度の部分的統一であつて、この限りに於いてそれは個別的生活態度の全體的統一である一般的生活態度の下位にあり、一般的生活態度に依つて貫かれてゐると見なければならぬ。そして吾々はその特殊生活態度を實踐的問題と關聯して各人の生活の特殊の方面に就いてこれを理解する。先きに示した「マリエンタールの失業者」の研究に於ける失業に對する態度がそれであり、また一般的には吾々の場合の労働の態度がそれである。

生活態度は右に述べたやうに、個別的生活態度、特殊生活態度、及び一般的生活態度として認識される。そしてこの三者の關係を更らに一般的に云へば、特殊生活態度は若干の個別的生活態度の部分的統一であつて、前者は後者の上位にあり、一般的生活態度は若干の特殊生活態度、或は特殊生活態度と個別的生活態度の全體的統一であつて、

それは特殊生活態度の上位にある。謂はゞ一般的生活態度を最高位とし、個別的生活態度を最下位とし、特殊生活態度をその中間に持つピラミッド形的關係の裡に、三つの生活態度が考へられる。そして上位的生活態度に於ける個性的特質は常にその下位的生活態度のより具體的なる姿の裡に顯現する。かくて最高位にある一般的生活態度は特殊生活態度に、特殊生活態度は個別的生活態度に顯現する。従つて上位的生活態度はその下位的生活態度から歸納的に認識せられ得ることは勿論であるが、生活體驗の考察に於いて、吾々は常に必ずしもこの歸納的方法に據らなくとも、上位的生活態度を認識することが出来る。しかし吾々はこの故にこの歸納的方法を輕視してはならないのであつて、この二つの方法に於ける考察が併用されることを以つて望まざればならぬ。況んや他人、吾々の場合には労働者が、彼自身の生活體驗をその種々なる客觀的表現を通じて、吾々の信頼し得る程度に傳へ得るか否かに尙ほ多少の疑問が時に存するからである。以上の如くにして上位的生活態度はその下位的生活態度のより具體的な姿を捨象した所に認識せられると云つていゝのであるが、また別の言葉を以つて云へば、一般的生活態度は生活の一般相に於ける、特殊生活態度はその特殊相に於ける、更らに個別的生活態度はその個別相に於ける環境に對する個性の能動相の現實的認識にかゝる。そして労働者心理学は通常その生活態度の研究に於いて労働者の一般的生活態度と、特殊生活態度としてのその労働態度の研究を重要視するものである。

理論上右の如く解せられる一般的生活態度、従つてまた特殊生活態度に關する生活心理學的問題は、先きに述べたやうに、その生活態度に於ける個性的特質に就いて個性に對する現在並に過去環境の形成作用を明かにするにあ

る。更らに特殊生活態度並に個別的生活態度に關しては、吾々は環境に對する個性の反應過程に於ける環境の制約作用に起因する生活感情の問題を具體的に取り擧げることにも出来る。そしてこの問題は實際の生活問題として確かに重要な問題であるが、それは單に附隨的な問題に過ぎないのであつて、このために右の生活心理学の基本的問題が輕視されてはならない(註四)。

註四 例へば R. B. Hersey の労働者の情緒生活の研究の如きは、労働者心理学の一研究としては些か吾々の基本的問題を輕視してゐる觀がある。(拙稿、最近の労働者心理学の一研究に就いて、本誌、第三十卷、第十號、參照)

個別的生活態度に依つて可能にせられた個々の生活態度は、心理學的にはまた次ぎの如く理解せられる。それは第一に環境の開發作用、即ち個性の反應に於いて成立する。第二にそれは時に別的生活態度に對する環境の制約作用が附加された結果である。かくて個々の生活態度は先づ環境の開發作用と制約作用——制約作用は有ゆる場合に常に存するとは限らない——との影響を受けた個性の客觀的表現である。そしてかくの如く理解せられた個々の生活態度が全體として各人の生活形態を構成する。其處で更らに全體としての生活形態に對して附言すべきことは、それが部分的に個々の環境條件の開發作用と制約作用の影響を示してゐる外に、各人の現在環境中の特定環境或は一定環境因子の、更らに過去環境のその形成作用を現實に示現してゐることである。

尙ほ生活形態に關して附言しなければならないことは、それが各人に就いてその總ての生活態度の理解を必要としないことである。吾々が生活の現在環境と呼ぶ所のものは必ずしも不變のものではなく、また日常生活に於いて

吾々は時に偶然的、一時的環境の出現に出會ふ。しかし吾々が生活形態を謂ふ場合には大體持續的現在環境を前提とするのであつて、従つて偶然的、一時的環境に對應する個々の生活態度の理解は生活形態の問題に於いては除外されてゐる。これに對して生活態度の理解に於いては吾々はこの偶然的、一時的環境に對する個々の生活態度を見逃してはならない。蓋し一般的生活態度、或はまた特殊生活態度に於ける个性的特質は時に偶然の機會に最も明瞭に示現せられることがあるからである。

生活形態並に生活態度に關する以上の如き理解に基づいて、吾々がそれを理解する労働者の日常の生活諸姿態は如何なるものであるか。吾々が豫めこれを示して置くことは具體的、個別の研究を導くものとして重要である。筆者は先きに述べたやうに、労働者の生活が労働の生活と自由時間の生活に二分されることを以つて適當と考へ、これに應じて労働者の生活諸姿態を二群に分たうと思ふ。そしてこのことは次節に述べる労働態度の問題をも考慮するの結果でもある。かくて労働者の生活姿態は凡そ次ぎの如くであらう。

I 労働生活上の諸姿態

- 1、勤続年數〔及び轉轉の回數〕
- 2、遅刻、欠勤
- 3、作業成績
- 4、災害の惹起

- 5、物的生産手段（機械、原料及びその他の經營設備）の取扱ひ、事故の惹起
 - 6、同僚との關係
 - 7、上役及び雇主との關係
 - 8、〔怠業〕
 - 9、〔同盟罷工〕
 - 10、〔その他〕
- Ⅱ 文化生活上の諸姿態（自由時間の利用）
- 1、居住年數（轉居、移住）
 - 2、性生活（戀愛、結婚）〔離婚〕
 - 3、家族の養育及び扶養 a、小供の養育
b、両親、その他のもの、扶養
 - 4、副業
 - 5、節約
 - 6、住居の設備及び整頓
 - 7、社交關係

- 8、趣味、慰安
- 9、信仰
- 10、團體活動への参加 a、労働組合運動
b、政治運動
- 11、〔その他〕

右の内〔 〕を以つて示したものは環境の變化、或は偶然的、一時的環境の出現に對する生活姿態であつて、従つて先きに述べた所に従つて、それ等の生活諸姿態は生活形態の理解に於いては除外せられるが、生活態度の理解に於いては吾々の看過し得ないものである。尙ほⅠに於いて吾々は特殊生活態度としての労働態度を、これに對してⅡに於いて吾々は——假りに部分的統一として云へば——文化的生活態度を、そしてⅠ及びⅡの全體を通じて一般的生活態度を理解することが出来る。更らにⅠ及びⅡ中の諸生活姿態を詳細に調査研究することに依つて、そして特種の實踐的重要さを考慮することに依つて吾々は労働者の特殊生活態度として倫理的、宗教的、政治的、階級闘争的生活態度等をも認識することが出来る筈である。これに對して労働者の生活形態はⅠの1-7、及びⅡの1-10の全體に渡つてのみ完結的に理解せらるべきものである。そして吾々はこれ等の生活諸姿態から労働者各人に就いての社會誌 Sociogram を作成することに依つて、彼等の生活形態を比較的明瞭に相互に比較し、各人の或は各種集團の労働者間にその生活形態に於ける特徴を容易に把握することが出来るやう。

最後に生活形態並に生活態度に於ける個性の理解に就いて尙ほ一言注意する必要がある。筆者は今まで單純に生活諸姿態が個性を直裁に表現して居るが如く見做して序述を進めて來たのであるが、客觀的に同一なる生活姿態は常に必ずしも同一個性の表現であるとは簡單に理解され得ない。單純に現はれてゐる生活姿態も時に複雑微妙な精神生活を基底としてゐる。従つて吾々は一般に個々の生活姿態が如何なる程度まである个性的特徴の徴候として信頼していかどうかを問題とする必要がある。夫れ故に吾々は生活形態及び生活態度の理解に於いては、出來得る限り労働者各人に就いて個々の生活體驗をば同時に明かにすると云ふ方法を探らなければならない。そしてこの點から云つても、労働者心理学の研究が簡單な個別的な研究方法を以つてしては到底不充分であつて、綜合的研究方法としての社會誌的方法 Soziographische Methode の重要を力説しなければならない。しかし此處では一般に研究方法の問題はこれを割愛しなければならない。

五

特殊生活態度としての労働態度は、既に述べたやうに、特定環境たる労働生活環境に對する各人の个性的反應に於いて理解せられる。しかし現實的には勿論労働態度は種々なる個別的な生活態度の部分的統一であつて、従つて吾々は労働態度の認識に於いては一方では労働生活に於ける各人の行動を詳細に觀察し、他方では各人の労働體驗を慎重に考察するの研究態度に出でなければならない。そして各人の労働態度に於ける个性的特質はその生活の現在並に過去環境の影響の裡に、——それは單に労働生活環境だけに限らないことを注意する必要がある。蓋し労働態

度は一般的生活態度の个性的特質を含む、より現實的な個性の顯現であつて、従つて一般的生活態度に關すると同様の、労働者心理学的基本問題が此處でも繰り返されなければならない——更らに遡つてはその父祖の個性の遺傳的素地に於いて理解することを努めねばならない。そしてこの基本問題に於いて労働生活に於ける生活感情上の問題が適當に考慮せられていゝ。即ち労働生活環境の各人に及ぼす制約作用、換言すれば労働生活環境と各人の個性との間の緊張關係に伴ふ生活の主觀的方面の問題がそれである。しかし環境の制約作用の存在の如何と、その主觀的狀態への反映の程度如何の問題は労働者各人の個性の問題に歸着しなければならない。従つて労働に於ける情緒生活を問題とすることは、労働者心理学の單なる附隨的問題たるに過ぎない。それ故にこの問題のために吾々の基本問題が押し除けられてはならないことは、既に前節中に注意して置いた所である。然るに従來労働者の生活に關する心理學的問題は、未だ充分労働者心理学の問題を理解することなくして、多く労働生活に於ける情緒的問題を重要視してゐる。

資本主義的工場制度の下に於ける人間の労働が苦惱に充ちてゐることを認識しやうと努めたのは、既に前世紀前半に於ける労働者問題に多大の關心を持つてゐた多くの社會科學者であつた。そしてその後労働者の労働からこの苦惱を取り除き、労働の喜悅を増進することが、労働者問題中に重要な一つの問題を構成してゐたと云つていゝ。この先例に従つて H. Herliker は夙に社會政策の基礎的問題として労働喜悅に關する労働者心理学的研究を重要視するに至り、その後今日に至るまでこの問題には常に多大の關心が示されて來てゐる。社會科學者並に労働者心理

學者のかくの如き關心の外に、勿論彼等の關心に影響せられてゐるはあるが、能率心理學者も亦この點に全然無關心ではない。即ち H. Münsterberg 等は既に「經濟的實驗心理學は過度の、労働に於ける精神的不満足、精神的萎縮、壓迫及び心氣沮喪を全然除去する目的を以つて、職業活動を個人の精神的特性に適應せしめることを以つて事實恐らく最高の任務とする」と述べてゐる。彼以後の能率心理學者はまた所謂労働の最適原則 Optimalprinzip を主張し、最近に至つて漸く労働態度の問題に近づかうとしてゐる。これ等の諸見解とその研究業績とを一々批判することは此處ではその處でない。唯だ筆者は従來の労働喜悅に關する研究が労働態度の問題の中心ではなくして、寧ろ附加的問題たるに過ぎないことを讀者に注意すれば足りる。即ち生活感情の問題は個性の問題にまで轉換しなければならぬ。

更らに労働者各人の労働態度の認識は次ぎの如き問題をその生活體驗の裡に明瞭にすることに依つて一層明かにせられるであらう。即ちその問題とは、(1)各人は如何にして現在の職業を選択するに至つたか、また(2)その職業上の將來の計畫が如何なるものであるか、を明かにすることである。そしてこれ等の問題は最近では F. Pailokat が東プロシヤのある地方の手工業徒弟並に青年農業労働者に關する研究に於いて指摘した所であるが、(註五)同様の問題は一般的生活態度の理解に於いても亦考へられていゝ。そして既にドイツ社會政策學會の行つた大工業労働者調査に於いては、労働者各人の(1)現在の職業に従事するに至つた理由、(2)職業變更の理由、及び(3)過去に、また現在懐ける一般的生活目標を特に明かにすることを重要視してゐる。しかも労働態度に關する限り、この問題は筆者

が前節中に示して置いた労働生活姿態の第一の點に關聯してゐる。

註五 拙稿、手工業徒弟並に青年農業労働者に關する労働者心理学の一研究(本誌、第三十卷、第五號)参照。

六

次いで吾々は労働者心理学體系上の第四の問題である労働者の個性の諸類型の設定、即ち労働者心理学に於ける類型學的研究に就いてその概要を傳へて置かうと思ふ。これ先き立つてこの類型學的研究の労働者心理学體系上の地位に就いて一言述べて置かう。労働者の生活環境を巨細に渡つてこれを明かにすることは、労働者心理学の研究の前段階をなし、生活形態並に一般的生活態度の問題と、これに附加して労働態度の問題とが、吾々の研究の中心をなして居り、個性の類型學的研究はこの中心的研究の延長であり、またその歸結である。

最初に類型の意味を多少明かにして置かねばならない。吾々の類型研究は生活形態に關係するのではなく、生活態度に關して行はれる。蓋し生活形態は環境の開發作用と制約作用の下に置かれた個性の客觀的表現であつて、個性の類型學的研究としてはこの環境の開發作用と制約作用とを捨象した生活態度に於ける个性的特質に就いて類型を考へることが、遙かに直接個性を問題にし得る所以である。しかし個性の類型設定に於いて環境の開發作用と制約作用とを捨象することは、個性に對する環境影響を全く捨象することではなく、それは寧ろ吾々をして個性の類型を環境の形成作用に於いて考へしめる途である。かくて吾々の謂ふ労働者の個性の類型とは、その生活態度に於ける過去並に現在の生活環境中の一定環境因子、或は特定環境、更らに理想型化せられた生活環境の個性に對す

る形成作用に基づいて設定せられる。また父祖の個性の遺傳的素地に於いても個性の類型は考へられる。更らに個性の類型は生活態度に關して考へられるが、それは勿論一般的生活態度と労働態度——特殊の場合として、例へば失業者に於ける失業に對する態度——とに關して設定せられることが望ましい。尙ほ個性の類型は一定環境因子或は特定環境、更らに理想化せられた生活環境の形成作用に就いて設定せられるが、吾々は生活環境中の有ゆる環境條件に就いて可能なる無数の類型を區別する必要はない。蓋し吾々の研究は實踐的科學の研究であつて、従つて常にその固有の實踐的目的に従つて實踐的な問題として重要視せられる環境條件に就いてのみ、個性の類型を考へれば足りるのであつて、徒らに理論的遊戯に墮することは正に慎まねばならない所である。

右の如く吾々の類型學的研究は一定環境條件の個性に對する形成作用の理解に基づくのであるが、從來心理学に於ける類型學的研究は多くは吾々の場合と甚だ異なるものである。勿論心理学に於ける從來からの類型學説は種々雑多であつて、これを一樣に批判することは素より不充分であるが、概して云へば從來の類型學的研究は現實の人間理解に於いて根本的に吾々とその立場を異にすると云つていい。例へば遠く古代に發する四氣質説の如き——多血質、膽汁質、黒膽汁質(憂鬱質)、粘液質——また人の性格をその容貌、或は體格に於いて、更らに血液型に於いて決定したり、或は C. G. Jung の外向性、内向性の類別の如き、更らに種々なる精神的機能に關聯する類型設定の如き、總てこれである。そしてこれ等の類型學的研究は共にその各々の立場に於いて現實の人間の理解に近づかうとするものであるが、其處では個性の辨證法的發展が理解せられず、その總ては超歴史的類型學として吾々の贊

同し得ないものである。また E. Spangier の如きは哲學的、形而上學的に設定せられた價值に基づく純粹類型を類別し——理論的、經濟的、審美的、社會的、政治的、宗教的態度——其處から現實の人間の理解に近づかうとしてゐる。彼のこの見解に對しても亦右の吾々の批評は妥當するが、彼の場合と吾々の場合とは全く研究の態度が逆である。吾々は現實的、歸納的に諸類型を區別しやうとするに對して、彼は豫め設定せられた類型を以つて出發しやうとしてゐる。元來心理学に於ける類型學的研究は從來人間そのものの本質を理解しやうとするものであつて、従つてそれが形而上學的類型論を生むことは當然であるが、その經驗的類型學にあつても、この故にそれが超歴史的類型學に墮すると云つていい。尙ほ從來の類型學的研究に於いて類別せられる個性の諸類型に、個々の研究を導く範疇としての方法論的意義が附せられるとしても、それに基づく實踐論が結局不徹底に終るか、或は高々能率心理学に於けるが如く人間の合理的利用に歸着するか、その孰れかであらう。

更らに吾々の類型研究に就いて讀者の誤解を招かないやうに注意すべき事實がある。先きに述べたやうに、吾々の類型は先づ労働者の一般的生活態度に關し、次いで特殊生活態度としての労働態度に關して設定せられる。従つて他の特殊生活態度、例へば政治的態度、倫理的態度、宗教的態度に就いて類型を考へやうとするものではない。しかしかく云ふことはこれ等の特殊生活態度の認識が吾々の場合に全く不可能であり、またそれが實踐的に全く無意義であるとするのでないことは、本論第四節中にも簡単に觸れて置いた通りである。そして更らに云へばこれ等の特殊生活態度は他の應用心理学部門、即ち政治心理学、道德心理学或は犯罪心理学、及び宗教心理学に於いて當

然重要視せられ、且つこれ等の應用心理学に於いてその労働者類型の設定に關して問題とせられる。(註六)従つて吾々は學問的分業に従つて、これ等の特殊生活態度を類型學的に考察することを他の應用心理学の努力に委ねていよ。しかも労働者の個性を全般的に問題とする吾々は、勿論労働者の生活の政治的、倫理的、宗教的方面、その他の生活の特殊相を全然考慮外に置き得ないのであつて、それ等を吾々は労働者の生活形態の問題に於いて、更らに一般的生活態度の問題に於いても適當に考慮し得ると考へる。唯だ類型研究に關してのみ直接それ等の特殊生活態度を問題としないと云ふに過ぎない。そしてこの點に於いて労働者心理学と他の應用心理学との稍々密接な關係が考へられる。

註六 類型學的研究としては甚だ不十分ではあるが、例へば先年吾國に於いても労働者の宗教意識の研究が行はれたことがある。そしてそれは吾々にも甚だ興味ある研究であるが、本來宗教心理学の研究に屬すものと云はねばならない。その研究とは次ぎのものである。

東京帝國大學文學部宗教學教室、労働者の思想に關する調査、大正十二年(非賣品)

以上吾々は個性の類型の意味に就いて述べたのであるが、更らに此處で類型設定の方法に些か觸れて置く必要がある。先づ類型設定の方法の基礎を明にしやう。吾々は個性の類型に於いて一定環境條件の個性に對する形成作用を理解しやうとする。しかし元來各人の個性は同一ではなく、人と環境の全體構造はまた各人に於いて同様ではない。従つて一定環境條件の人と環境の全體構造中に占める意義は嚴密に同一ではなく、その個性に對する形成作用

も嚴密には同様ではあり得ない。かくて此處に一定環境條件の形成作用の結果であると見做される個性的特質は、理想型化された類型としてのみ認識され得るのであつて、それは當然各人の現實個性の特質から多少乖離するものとならなければならない。そしてこの類型は單純に確定せられるのではなく、各個人に就いて慎重な比較研究を繰り返したる後に初めて可能とせられる。しかし吾々の研究は他方に於いては統計的方法を利用することに依つて比較的容易とせられる。即ち一定環境條件を等しく持つ所の多數の労働者に於ける個性的特質に關する統計的平均、その一般的、蓋然的傾向を確めること、勿論しかしそれは單なる蓋然的傾向に過ぎないのであつて、それが當該一定環境條件の影響であることを確證するためには、吾々は更らにその環境條件を異にする他の多數の労働者に於ける同様の統計的結果とそれとを比較することが重要であり、更らにより根本的なことは、各個人に就いて先きに述べた慎重な比較研究を行ふことが必要である。即ち類型の確定は統計的比較方法と各個人に就いての比較方法とに基づいて可能とせられる。

筆者は右の序述中に、個性の類型が現實個性の理想型として理解せられることを述べたが、此處で更らに現實個性と類型との關聯に就いて述べなければならぬ點が存する。即ち各人の個性はその父祖の個性の遺傳的素地の上に生後の諸環境條件の形成作用を受けつゝ、辨證法的に發展し來つたものであるとすれば、現實の個性は類型學的に云へば、單一類型的ではなく、多類型的、統一的構造を持つものと云はねばならぬ。従つて類型學的研究は、それが現實的の人間理解の目的に従ふ限り、各人の、また特定集團の労働者の生活史的研究に基づいて、辨證法的發展を

なしつゝある個性の多類的、統一的構造を明かにする、といふ方法的立場を忘れてはならぬ。

以上筆者は個性の類型及びその類型學的研究の意味に就いて些か論旨を明かにした。然らば吾々は右の所論に基づいて凡そ如何なる個性の類型を區別することが出来るか。筆者は大體次ぎの如き諸類型を類別し得ると考へる。

労働者の個性の諸類型

I 歴史的類型(發達心理學的類型)

- 1、労働者の兒童の類型
- 2、青年労働者類型(男、女)
- 3、成年労働者類型(壯年、中老、老年)

II 社會的類型

- 1、家系的類型(父祖の職業。農民、労働者、手工業、中・小商、工業者、その他)
- 2、家庭的類型(農民、労働者、中産階級、その他)
- 3、出身地類型(農村、大、中、小都市)
- 4、地域的、或は居住地類型(農村、大、中、小都市)
- 5、國民的、或は民族的類型
- 6、無組織労働者類型

- 7、組織労働者類型(各種労働組合別)
- 8、階級的類型
- 9、失業者類型

III 職業的類型

- 1、工場労働者類型
 - a、男工
 - (イ)不熟練労働者
 - (ロ)半熟練労働者
 - (ハ)熟練労働者
 - b、女工
- 2、鑛山労働者類型
- 3、交通業労働者類型
- 4、建築業労働者類型
- 5、手工業労働者類型(親方、職人、徒弟)
- 6、自由労働者類型
- 7、下級事務員類型
- 8、商業使用人類型
- 9、農業労働者類型

10、漁業労働者類型

右の諸類型に對し若干の注意を加へて置かう。先づその諸類型の名稱に依つて各々一定の環境條件が考へられてゐることに注意せらるべきである。しかし其處に考へられてゐる一定環境條件は、現實には各個人の場合にあつて詳細且つ嚴密には殆んど總て同一ではない。其處で先きに述べて置いたやうに、これ等の生活環境條件は類型學的研究に於いては理想型化されたものに就いて考ふべきである。しかし例へば工場労働者類型に於ける工場環境の如きは、工業の種類に従ひ、またその經營規模の大小に従つてその環境條件を一樣のものとして考へることが、果して妥當であるか否か、甚だ疑問である。夫れ故に吾々は此處に工場の種類並にその規模の大小に従つて種々なる類型を區別するのが、或は適當であるかも知れない。更らに労働者の個性の類型は以上に示したものに盡きてゐるのではない。吾々は實踐的重要さに應じてこれ以上に種々なる類型を適宜設定することが出来る。例へば紡績女工類型の如き特殊工場女子労働者類型、或は商業使用人類型中に特に百貨店従業員特型(男、女)を擧げるが如きは實踐的な重要性を多分に持つ。更らに行商人類型であるとか、また居住地類型を右に示したものよりも一層具體的に、貧民窟居住者類型、舍宅、或は寄宿舎居住者類型等、凡そこれ等の諸類型の設定は共に多少の實踐的意義を持ち得るであらう。尚ほ右に示した諸類型を一々説明する必要もないが、多少注意すべきことは、例へばⅡ2とⅡ3は現實には重り合ふことがある。即ち家庭的類型に於ける父の職業が農業であることは出身地類型の農村の場合と重複するし、ドイツ社會政策學會の調査に於いては、大體労働者の家庭に育つたものは大都市の出身者であり、手工業

者の家に生れたものの中、小都市の出身者であつた。従つてかくの如き重複が事實繰り返されるものである以上、實踐的視角から吾々はその孰れかの類型を重視してゐる。しかし理論上一應これ等の類型が區別せられ得ることは云ふまでもなからう。また同様のことはⅠ2の女子の場合とⅢ1aの女工の場合とに就いても云ひ得ることである。更らにⅢの8910の諸類型はこれを吾々の労働者心理学の研究から除外してもいい。それはこれ等の類型研究の重要さを否定するのではなく、労働者心理学に並んで商人心理学並に農民心理学が相當に發達することを豫想してゐる。

右に示した諸類型を個々に説明することはこれを省略するが、唯だその内社會的類型中の階級的類型に就いて多少述べて置き度い。先づ階級的類型は抽象的に云へば他の社會階級から區別せらるべき標識となる生活環境條件の影響を問題する。これを少しく具體的に云へば其處に生産手段の所有からの分離、賃銀所得と雇傭關係、その雇傭關係に於ける從屬的地位、他人命令的労働等の諸點が考へられる。これ等一連の諸條件の労働者の個性、その一般的生活態度並に特殊生活態度としての労働態度に對する影響が吾々の問題である。此處で讀者に特に注意し度いのは、吾々の階級的類型が理論上所謂階級意識を問題とするものでないことである。階級意識は特殊生活態度の問題として取り擧げらるべきである。先きに示した生活諸態中上役及び雇主との關係、怠業、同盟罷工、労働組合運動並に政治運動への参加を中心として、これ等の生活の個別相に於ける個別的な生活態度の部分的統一としての特殊生活態度として、階級意識が考へられる。そして先きに述べたやうに吾々の類型研究は労働態度以外の特殊生活態

度とは無関係である。かくの如き理論的立場から、此處に問題とした型類が階級的なる形容詞を探ることを以つて、直ちにそれが階級意識を問題とすると考へてはならないのである。

しかし階級的類型と階級意識の問題のこの理論上の區別にも拘らず、筆者は事實この二つの問題が必ずしも全然別内容のものではなく、内容的には恐らく接近せるものであることを否定し得ない。蓋し特殊生活態度としての階級意識の問題を生活心理學的に追及すれば、或は右に示した労働階級的生活環境の影響としてそれが明かにせられるかも知れないからである。しかも筆者が尙ほ右の如く階級的類型と階級意識の問題とを理論上區別すべきことを此處に特に讀者に注意する所以は、一方では吾々の類型學的研究の理論的基礎を更らに明かにし、他方に於いては、そしてこれがより重要であるが、從來屢々問題とせられて有名である階級意識の問題の所在を明かにしやうとするにある。確かに従來の労働者心理学の研究に於いては、階級意識の問題が重要視せられてゐる。R. BrodaとJ. Deutschの共著「近代プロレタリアート」(一九二〇年)は正に労働階級心理学の研究であり、またウォルトは彼の労働者心理学的研究の問題の中に、「労働階級内に諸種の層が、即ち社會的分化が成立するのは如何なる秩序に従つてあるか」との一問題を附加することを忘れてはゐない。またヘルクナーは社會政策學會の調査の結果に基づいて、「統一的、一般的階級意識の存在を否定して、「プロレタリアートは本質的に統一的な集團をなすものではない」ことを力説してゐる。階級意識の問題はかく一方では労働階級の統一的集團の存在を、他方ではその分裂的、分化的存在を主張するものとして現はれてゐる。これに對して筆者は労働者心理学の立場から次ぎの如く云はなければならぬ。

即ち、階級意識の問題を單純に労働者の階級生活環境の影響に歸して問題が終れりとするのも、また單に個々の環境條件の影響をヘルクナーの如く單純に羅列的に認めて労働階級の分化を説くことも、共に未だ不充分である。かくの如く簡單に考へることは共に労働者の個性の辯證法的發展と、この發展に於ける個性の構造とを明かにするものではない。換言すれば個々の環境條件の個性に對する影響が各人の、特種集團の労働者の生活史的考察に於いて明かにされて行くことが必要である。

類型學的研究から問題を多少横に逸したが、最後に類型學的研究の意義に就いて述べて置かう。先きに筆者は類型學的研究が、労働者心理学の中心問題である一般的生活態度と特殊生活態度としての労働態度の研究の延長であり、またその歸結であると述べて置いた。更らに類型學的研究が特に實踐的重要性を持つことを繰り返して述べた。筆者は此處に類型學的研究の意義を理論的方面と實踐的方面に區別して、些かこれに説明を加へ度いと思ふ。

類型學的研究の理論的意義は凡そ次ぎの如くである。生活態度に關する研究は労働者各人に就いて行はれ、次いで多數の特定労働者或は特定集團の労働者に就いて行はれる。そして總てこれ等の個別研究が累積され、若しくは多數研究者の共同努力の下に個別研究が行はれる場合には、それは當然理論的研究の發展として先きに述べた比較研究に従つて類型學的研究を生まなければならぬ。この意味に於いて類型學的研究は個別研究の理論的發展であると云ふことが出来る。そして例へばドイツ社會政策學會の大工業労働者調査の殆んど大部分を通觀したM. Bernays 女史の努力(註七)は尙ほ不充分ではあるが、確かにこの意義を含んでゐる。しかしその後今日に至る

まで労働者心理学の研究は既に相當の數に達して居り、特に従來はその青年労働者に關する個別的研究が、また最近では失業者に關する個別の研究が稍々累積せられてゐる觀があるが(註八)、不幸にして未だ吾々の期待するやうな慎重な類型學的研究が、其處から生れてはゐないのであつて、従つて吾々は類型學的研究に關する限り、全く研究者の今後の努力に期待せざるを得ない。謂はゞ現在までの労働者心理学の研究は尙ほ大體個別の研究の時代であると云つていい。それは兎も角として、かくの如く個別の研究の理論的發展として個性の類型學的研究が考へられ、且つ筆者が右に示した個性の諸類型が確實に設定せられることは、理論上逆に個別の研究をそれだけ容易ならしめるものであると觀られる。勿論類型學的研究の慎重さを期待して云へば、既に設定せられた諸類型は一方では個別研究に依つて更らに檢證され乍ら、他方では個別研究に於ける吾々の基本的問題の理論上の解決を容易に導き得るものである。そして此處にこそ類型學的研究の理論上の意義がある。

註七 M. Barnays, Berufszahl und Berufschicksal des modernen Industriearbeiters, in: Archiv f. Sozialwiss. u. Sozialpol., Bde. 35u. 36, 1912-13.

註八、從來の労働者心理学の個別研究に就いては、筆者は最近甚だ不充分乍らその文献の調査を行ひ得たのであるが、今本論にこれを附加する餘裕はない。しかし近く別の機會にこれを發表する豫定であるので、讀者はそれに就いて右の點を参考にせられ度い。

更らに労働者の個性の類型學的研究の持つ實踐的意義は凡そ次ぎの如くである。吾々の實踐的問題は生活感情の

問題と關聯して環境の制約作用にも存するが、それは寧ろ根本的には個性の問題として究極環境の個性に對する形成作用に關聯しなければならぬ。この意味に於いて環境の個性に對する影響を實踐的に重要視するためには、云ふまでもなく各種環境條件の個性に對する形成作用が理論上明かにされてゐなければならない。換言すれば個性の類型學的研究が慎重且つ廣汎に行はれてゐなければならない。そして後にも論ずるが如く、労働者の生活に關する實踐的問題の多くが特種労働者の多數のもの、或は特定集團の労働者を對象とするのであるが、この場合には特に類型學的研究が實踐的に重要な意義を持つ。個別研究が類型學的研究の理論上の前段階をなすといふ筆者の見解は、類型學的研究がそう容易には信賴し得べき結果には到達し得ないことを意味するのであつて、また事實從來の個別的諸研究は吾々の基本問題を充分理論的に解決して居らず、夫れ故に實踐的立場から觀ても亦直ちにそれに依據し得ないものである。

これを要するに、労働者の個性の類型學的研究は生活態度に關する理論的研究の發展であり、また労働者心理学の實踐的立場はこの理論的發展を當然に要求するものであると云つていい。そして此處に類型學的研究の意義がある。

七

労働者心理学に於ける以上の理論的研究は結局應用心理学的實踐を基礎づけるものでなければならない。そして吾々は此處に労働者各人の個性の望ましき發展のために、彼等の生活の現在環境を人爲的に調整し、個々の環境條

件を變更する實踐的問題を解決することが出来る。

本節に於いて吾々はこの労働者心理学の實踐に就いて多少問題を展開して見度いと思ふ。労働者心理学の實踐は方法的には個人に就いて行はれ得るし、また最も普通には集團的に行はれる。更らに環境の調整は二様に行はれ得る。即ち一方では人を別の環境條件の存在する所に移すことである。例へば都市から田園へ、或は國內移住、海外移民の方法の如きはこれである。これに對して他方では人を空間的に移動せしめることなくして、現在環境を部分的に變更することも出来る。そして最も普通に行はれる環境調整はこれである。——そしてこれ等の實踐を假りに、F. Case の主観的並に客観的精神技術學 (Subjektive und Objektive Psychotechnik) なる名稱に倣つて、前者を主観的實踐、後者を客観的實踐と稱してもいゝし、また單純に前者的を消極的實踐、後者を積極的實踐と呼んでもいゝ。——かくの如く労働者心理学の實踐は個人的實踐と集團的實踐とに於いて、更らに消極的實踐と積極的實踐とに於いて行はれ、この組合せに依つて事實は四通りの環境調整が成立する譯けである。そして吾々の實踐は方法としてはこれ以上の問題は存しない。しかし労働者心理学の實踐そのものに關しては問題は別に存在する。

從來諸社會科學の實踐的問題はまた労働者の生活環境の變更を目的としてゐる。従つて社會諸科學の實踐的問題、就中社會政策、或は労働者政策の問題は心理學的には正に労働者心理学の問題であると觀られる。先きに筆者は労働者問題が經濟的、物質的問題である、と同時に人間の問題であり、従つてそれはまた當然心理学の問題であることを述べて置いた。また労働者問題は心理學的には労働者の生活形態と生活態度の問題であることも指摘して置い

た。この意味に於いて筆者は労働者問題を廻つて、社會科學者と心理學者の協同の努力を期待するものである。既にヘルリナーは社會政策の基礎問題として労働者心理学の研究を重要視したし、またマックス・ウェーバーは社會政策學會の労働者調査を指導して、特に社會科學者と心理学の提携の必要を説いてゐる。しかし不幸にして今日に至るまでかくの如き期待は一般に充分果されてはゐない。この點が筆者をして讀者に問題を提起せしめる所以である。即ち、社會科學者と心理学者の協同が實施されない限り、——勿論その責の大半は從來の心理学の無自覺に歸せられねばならない——今日労働者の生活環境の調整を専ら基礎づけてゐる社會科學の實踐を、吾々が労働者心理学の視角から再吟味することは、吾々に課せられた當然の任務である。

更らに今一つの問題は、從來労働者問題が人間の問題でもあると云ふ點から、また事實それが人間の問題であることを特に力説することに依つて、學者も實際家も共に労働者に觀念論的教育を與へることに依つて、問題が解決され得ると考へてゐることである。筆者の觀る所を以つてすれば最近の労働者心理学の發展の端緒を開いた P. Coche は、その生活心理學的研究にも拘らず、「労働者問題は單なる胃の腑と賃銀の問題である許りではなく、先づ教育と宗教の問題である」となし、また E. Hornetier は「社會問題が特に精神的、倫理的問題である」と主張し、労働者に對する觀念論的教育を重要視してゐる(註九)。しかもこれは單に二二の例に過ぎないのであつて、凡そかくの如き見解とその實踐が労働者問題を廻つて舊くから何處に於いても存在してゐたことは、讀者の充分承知せられる所であらう。しかしかくの如き見解は、その主張にも拘らず、未だ眞に労働者問題が人間の問題であることを知ら

ないものである。蓋し生活心理学の立場からすれば、人を教育することはその生活環境中に教育的環境を附加することであるに過ぎない。そして右の如き見解は單にこの一環境条件の影響のみを誇大して考へやうとするものであるが、問題がかく一般的に單純化される程簡單でないことは、今更筆者が説き加へる必要も無からう(註一〇)。

註九 E. Hornfefer, Der Weg zur Arbeitsfreude, S. 8-10.

F. Ludwig, hersg. von, Der Mensch im Fabrikbetrieb, 1930, S. 6.

拙稿、労働喜悦論(本誌、第二十九卷、第五號、二三頁以下参考)

註一〇 筆者は先年本塾奥井教授の行はれた「學生調査」に基づいて、學生の思想生活の研究をなしたが、——そしてこれは色々な點に於いて甚だ不十分な研究であつたが——吾々は學生の場合でさへ、彼等の精神生活が學園環境の影響を多大に受けるものであることを認め乍ら、尙ほ他の環境条件の重要さを否定し得なかつたのである。況んや労働者の場合に於ける教育的環境の意義が、この吾々の甚だ貧弱なる一例から觀ても、誇張されてはならないと考へられる。奥井・藤林、學生々活の思想的方面の一調査(本誌、第二十九卷、第十號)参考。

以上述べたる如く、今日普通に行はるゝ労働者問題に關する見解とその實踐とを顧慮すれば、如何に労働者心理学の研究が重要にして且つ必要であるかが明かとなるであらう。

八

以上筆者は労働者心理学の體系を甚だ粗略に論述した。それは謂はゞ單に労働者心理学の骨組を示したに過ぎない。その内容的な肉付けは今後の努力に期待されねばならない。しかも以上の筆者の論述を通じて、多少とも労働

者心理学に對する讀者の理解を進め得たとすれば、甚だ幸ひである。

筆者は先年「經濟心理学」なる著作を公にし、その内に労働者心理学の成立を説いたのであるが、それは今から見ると至極不十分な點が多いのであつて、それを補正しやうといふのが筆者自身に於ける本論の目的であつた。この點で一般の讀者には甚だ不親切であつたが、多くの當然附すべき註を省略したのは右の拙著を參讀せられる讀者には不必要だと考へたからであり、また事實筆者は本論と重複しない部分に就いては、特に本論と重要な關係を持つ労働者心理学の研究方法に就いては拙著を參照せられんことを希望する。尙ほ本論に於いて筆者が從來の見解を補正しやうとした點の一つは、環境心理学的研究の考慮であつて、この點に就いては次ぎのものを參照せられ度い。但し環境心理学的研究は現在尙ほ多く兒童の生活心理学として、従つて教育心理学の新しい傾向として存して居り、筆者の期待するやうな一般環境心理学の確立は未だ今後に存すると云つて可い。

A. Busemann, Pädagogische Milieukunde, I, 1927.

Denselben, hersg. von, Handbuch der pädagogischen Milieukunde, 1932.

W. Hellpach, Die geopsychischen Erscheinungen, 3. Aufl., 1923.

Derselbe, Psychologie der Umwelt. (Abderhalden, Hdb. d. biolog. Arbeitsmethoden, VI, CI, 3.)

W. Popp, Das pädagogische Milieu, 1928.

Derselbe, Milieu und Selbstbestimmung, 1930.

J. O. Wertes, Die Grundlagen einer Milieupsychologie, 1937.

拙稿、現実的人間研究の二つの著作、(本誌、第三十一卷、第九號)

山下俊郎著、教育的環境學、昭和十二年

—昭和十二年九月十日稿了—

古版經濟書解題

サー・マシュー・デッカー著一千七百四十四年版『外國貿易
衰頹の原因に關する試論』

高橋誠一郎

吾人は昭和七年版拙著『重商主義經濟學說研究』中に於いて、一再ならず匿名氏の著『不列顛の外國貿易、從つて其の地所の價值減退の諸原因に關し、又、是れ等兩者を回復するの手段に關する一論』(An Essay on the Causes of the Decline of the Foreign Trade, consequently of the Value of the Lands of Britain, and on the Means to restore Both, begun in the Year 1739.)に言及した。(同書二五—六頁、一九〇頁、三九〇—一頁等参照)。而して此の書の著者が果して何人であるかに就いて若干の疑問が存する旨をも附記した。(同書一九〇—一頁参照)。然も、吾人は當時に於いては、未だ本書の初版、即ち一千七百四十四年版を所有することなく、専ら其の一千七百五十年の増補再版を使用した。其の後に至り、幸にして初版本を購入することを得たので、爰に其の解題を草することとする。再版が十二折判百八十三頁なるに對し、初版は小形四ツ折判百十二頁である。